

形而上学における理論的对象

野上 志学 (Shigaku Nogami)

東京大学

本発表では、形而上学における理論的对象の導入の問題点を検討する。デイヴィッド・ルイスは彼の可能世界の存在論を「哲学者の楽園」と形容したことはよく知られている (Lewis 1986)。彼によれば、可能世界の存在論は哲学の様々な問題に説明を与え、まさにそのことによって可能世界のような理論的对象の導入は正当化される。この種の論法は、理論的对象の導入の正当化のため多くの形而上学者に採用されていると言えるだろう。

端的に言えば、ルイスや他の形而上学者が理論的对象の導入の正当化に用いているのは最善の説明への推論 (Harman 1965, Lipton 2004) である。したがって、形而上学における理論的对象の導入の是非を検討するためには、最善の説明への推論をそのような形で使用することが許されるのかということを検討しなければならない。

この目的のため、形而上学における理論的对象の導入を、科学における理論的对象の導入、そして数学的对象の存在論の正当化と比較する。そして、これらの差異を指摘することで、科学における理論的对象の導入の妥当性、そして数学的对象に関する不可欠性論証 (Putnam 1979) の妥当性を認めたとしても、形而上学において理論的对象を導入することは正当化されないと論じる。この根拠は主に、理論的对象が持つべき説明力の根拠となるような内在的性質あるいは構造的特徴を、形而上学における理論的对象が持たないことに求められる。

議論に具体性を持たせるため、本発表では特に、可能世界理論とトローブ理論 (秋葉 2014) という、分析形而上学における代表的な二つの理論的对象を使用する理論を題材として取り上げる。